



ハンガ リーの話



川崎ゆきお

老紳士がぼやいている。

「最近話を聞くのが億劫になりましてねえ」

「耳が悪いとか」

「そうじゃないが、話の中には世界があるでしょ」

「ああ、世界ですか」

「日本と世界の違いじゃなく、その話の中身だよ。具体的な」

「はい」

「それに付き合うのが億劫でねえ」

「そうなんですが、でも面白い話も多いですよ」

「たとえば、最初からハンガリーのとある農村で……となると、もういけない」

「日本人が出ていてもですか」

「ハンガリーなんて知らないよ。そんな外国での話なんて、聞きたくない」

「具体的にになると駄目なのですか」

「そうじゃないが、知ってる話の方がいいねえ。知らない土地でも、東京の池袋が舞台なら、何となく分かる」

「はい、新宿、渋谷、銀座とか、分かりやすいですよ」

「しかし、大阪の平野になると駄目だ」

「何処ですか」

「地名だよ。古い町だ。平野区だ。大阪までいい。しかし平野になると駄目だ」

「河内はどうですか」

「それはいい。場所はねえ名前のない町でいいんだ。山の中とかでもね。下手に地名が入ると知らないだけにいらいらする」

「そ、それは」

「だからハンガリーで暮らす日本人の日常なんて、聞きたくもない」

「事件でもあれば、いいんじゃないですか。その事件が面白ければ」

「いや、人物名が覚えられんし、地名も分かりにくい。地形もね」

「じゃ、どういうのなら、いいのでしょうか」

「吸血鬼が出た、ならいい」

「ほう」

「これなら吸い付ける」

「吸うのですか。まるで吸血鬼ですねえ」

「話にね」

「分かっていますよ」

老紳士はニヤリと笑う。

お約束通り、その口元から見える歯は尖っていた。

